

「問題発見・解決型教育」三つの誤解

SFCが新語として鑄造し、世の中一般に使われるようになった言葉は少なくない。「AO (admissions office) 入試」はその典型的な例だろう。また、大学教育のあり方に関していえば、従来の知識伝授型教育ではなく「問題発見・解決型教育」に移行することが重要である、という言い回しも人口に膾炙している。このキャッチ・フレーズは、いうまでもなくSFCの教育理念であり、大学における教育および研究の基本方向を示すものとして、今後とも重視していきたい。

三つの誤解とその結末

しかし、学生諸君の中には、その意味を深く理解せず、安易に捉えているケースもかなりあるように思う。三つの誤解がある、とでもいえようか。

第一の誤解は、世の中の新しい「問題」は、既存の各学問領域の勉強をしていないフレッシュな頭の方が、既存の研究成果を習得した頭よりも「発見」能力が高い、という思い込みである。第二の誤解は、問題を発見すれば、その問題の「解決」というステップが次にくる、という短絡的な発想である。そして第三の誤解は、問題の解決策は問題の性質と独立して考えることができる、という認識である。

これらの誤解がある場合には、結局、基礎的な勉強や関連分野の幅広い文献の渉猟を怠る（ないしそれは無意味であるとさえ考える）一方、思いつきの政策的処方箋を並べる、ということになってしまう。授業の課題レポートをみても、残念ながらこのような印象を受けるものに少なからず出くわす。

問題発見・解決型教育の本来の意味

筆者の理解によれば、問題発見・解決型教育とは、そのような安易なものではない。まず「問題」という場合、それは取扱いが面倒なことがら (problem) という意味と、検討課題 (issue) という意味のいずれか、または両方の意味があるので、そのいずれを問題にするかをまず知る必要がある。しかし、重要なのは、いずれの場合でも問題が白いキャンバス (勉強していない頭) のなかに天から降ってくるということは、決してないことだ。

問題発見に至るには、まず先達による関連研究を自らの頭の中に猛烈に勉強してインプットし、それを次第に発酵させるという過程を経ることによってある時点で突然新しい見方がひらめく (発火点に達する)、というプロセスによる以外にはありえないのではないか。何もインプットしていない頭の中に、従来誰も気がつかなかった意味深い問題が突然わき出る、などということはいえない。

また、たとえ問題を発見したとしても、次にその問題の性質を定性的・定量的に解析しなければ、問題の持つ深い意味を理解したことにはならない。SFCのカリキュラムの上で四本柱の一つとされているデータ分析の科目や、各種の理論的訓練を課題とする科目は、ここで役に立つことになる。

さらに、問題の「解決」策の探求とは、最終的には行動につなげるとの意識を持って問題の性質を解明しようとするのであり、そうした意識をもって分析努力をするならば、解決の基本方向はある程度自然ににじみ出てくる、といえるのではないか。

問題発見・解決型教育というのは、あくまで簡略化したキャッチ・フレーズとしての表現であり、その内容を正確に言えば「新しい問題ないし論点の発見・その性質の解析・解決策の提示」を基本型とする研究・教育のシステムである、と筆者は考えている。

学生に求められる猛烈な努力

つまり、問題発見・解決型教育においては、従来の大学教育よりも、勉学のうえで学生の自主性を従来よりも強調するとともに、学生により猛烈な勉強を求め、そしてその過程においては常にアクション（政策）につながる意識を持ち続けること、が不可欠である。このことを改めて学生諸君に説明する新学期が、今年度（二〇〇〇年度）も今から始まろうとしている。

（慶應義塾大学SFCニューズレター「パンテオン」十一巻一号、二〇〇〇年四月）